

すいれんは咲いたが

小川未明

青空文庫

きんぎよばち
 金魚鉢にいられてあるすいれんが、かわいらしい黄色きいろな花はなを開ひらきました。どこから飛とんできたか小ちひさなはちがみつを吸すつています。勇ゆうちゃんは日ひ当あたりに出でて、花はなと水みずの上うへに映うつつた雲くも影かげをじつとながめながら、

「木田きだくんは、どうしたろうな。」と、思おもいました。

ふたり
 二人は、同おなじ組くみでいっしょにテッドボールをやれば、まりほうりをして遊あそんだものです。木田きだは、小ちひさくなつたズボンをはいていたもので、うずくまるとおしりが割われて、さるのおしりのように見みえたのも目めにうつってきました。

ある日ひのこと雑誌ざっしを貸かしてやると、

「ふなをあげるから遊びにこない？」と、木田はいいました。

勇ちゃんゆうは、ふながほしかつたから、急にゆきたくなりました。

「どうしたの、君が釣ってきたのかい。」とたずねました。木田は、棒切れぼうきで砂すなの上うえに字じをかきながら、

「ああ、お父さんとうと川かわへいつて釣ってきたんだ。こんど、君もいつしよにゆかない？」と、いきいきとした顔かおを上げたのであります。

「いつか、つれていつておくれよ。君のお父さんとう、釣るのはうまい？」

「なにうまいもんか、いつも僕ぼくのほうほうがたくさん釣つるのさ。ふなをあげるから、遊びあそにこない。」と、木田きだはすすめたのでした。

「いこうか、じゃ、うちへ帰つたら、かばんを置いてすぐにね。」
 遊びにゆく約束をしたので勇ちゃんは、その日、木田から教
 わつた道を歩いてたずねてゆきました。すると坂の下のところ
 小さなみすばらしい床屋がありました。

「この床屋かしらん。」と、勇ちゃんは思ったが、まさかこんな
 汚らしい家ではあるまいというような気もして、その前までいっ
 てみると、木田の姿が、すぐ目にはいったのです。

「勇ちゃん、裏の方へおまわりよ。」

木田は、喜んでたずねてきてくれた友だちを迎えました。みか
 ん箱を持ってきて、中からいろいろのものを出して拵げました。
 珍しい貝がらもあれば、金光りのする石もあり、また釣りの道

具もまじっていれば、形かたちの変わったべいごまもはいつていました。
「こんど釣りにゆくとき、さおがなかつたなら、僕ぼくのお父とうさんに
造つくってもらうといいぜ。」と、木田きだはいいました。木田きだは、なん
でもお父とうさんにといいのです。それで、勇ゆうちやんが、
「君きみのお母かあさんは？」と、きくと、木田きだは、急きゆうにさびしそうな顔かお
つきをして、

「僕ぼくのお母かあさんは、なくなつたのだ。お父とうさんと二人ふたりきりなんだ
よ。だけど、さびしいこともないや。」と、口くちだけでは、元げん気に
いいました。木田きだくんのお父とうさんは、木田きだによく似にていました。
脊せが低ひくくて、丸まる顔がおでした。白しろい仕事服しごとふくを着きて、お客きやくの頭あたまを刈か
つていましたが、それが終おわつたとみえて、二人ふたりの遊あそんでいるへ

やへ塩せんべいの盆と、お茶のはいつた土びんと持ってきて、

「よくいらつしやいました。」と、置いてゆかれたのでした。

勇ちやんは、歸りに、ふなを三匹もらつて、ブリキかんの中へ
いれて下げながら、お母さんのない木田くんのことを考えつつ歩
いてきました。

「しかし、やさしい、いいお父さんだな。」と思うと、なぜか
らずに熱い涙が目の中にわいてきました。

その後学校では、二人はいつとう仲よくなりました。

ある日のこと、勇ちやんのお母さんは、だいぶ髪の毛の伸びた勇
ちやんの頭を見て、

「きようは、お湯をわかしますから、床屋へいっておいでなさい

。「とおつしやいました。勇ちゃんゆうは、床屋とこやへゆくのがきらいで
した。それで、いつもおとなしくいつたことがなかったのですが、
「僕ぼくのお友ともだちのうちの、床屋とこやへいってもいいでしょう。」とた
ずねました。

お母かあさんは、床屋とこやへゆくのがいやなものだから、また、なにか
いいがかりをつけるのだと思おもいましたので、

「いつもの床屋とこやへおいでなさい。そのお友ともだちの家うちというのほど
こですか。」とおつしやいました。

「遠とおいところで、小ちいさな床屋とこやなんです。」

そばで、この話はなしをきいていたお姉ねえさんが、

「汚きたない床屋とこやへいって、病びょうき気きでもうつるといけなから、いつも

の床屋へいったほうがいいでしょう。」といわれました。

けれども、勇ちゃんは木田のうちのことを考えると、自分は、

どうしてもあすこへゆかなければならぬような気がしました。

「僕は、ほかで頭を刈って遊びにゆくと、なんだか気がすまんの

だもの。」といいました。するとお母さんは、その心持ちをお

察しになって、

「ほんとうに、そうお考えなら、お友だちのお父さんに、刈って

おもらいなさい。」と、おっしゃったのです。

そんなことがあって、以後勇ちゃんは、ずっと木田くんのとこ

ろへ行って、髪を刈ってもらいました。そして、お父さんとも仲

よしになりました。

ところが、突然とつぜんのことでした。木田きだが学校がっこうで、

「勇ちゃんゆう、僕ぼくのうち急きゆうに引ひつ越こすので転校てんこうしなければならん

のだよ。だから、きよう遊あそびにおいでよ。」といいました。

「どこへ引ひつ越こしするの？」

「遠とおい、浅草あさくさの方ほうなんだ。」

その日ひ、勇ゆうちゃんは、学がっこう校がっこうから帰かえると遊あそびにいきました。

すると、もう店みせには道具どうぐがなかったのです。

「このすいれんをあげよう。クリーム色いろの花はなが咲さくんだけ。」と、木田きだが裏うらから持もつてきました。

「坊ぼつちゃん、よく頭あたまを刈かりにきてくださいましたね。勉べん強きやうし

てえらい人ひとにおなりなさいよ。」と、お父とうさんがいいました。

ちようど一年^{ねん}たつて、そのすいれんの花^{はな}が咲^さいたのです。けれど、木田^{きだ}くんからは、一度^どもたよりがありません。勇^{ゆう}ちゃんも花^{はな}をながめながら、友^{とも}だちとお父^{とう}さんの無^ぶ事^じを祈^{いの}ったのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「すいれんは咲《さ》いたが」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すいれんは咲いたが

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>